

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

第1回 フォーラム検討会議

逐語録

(木村) この会合の名前を適当に考えましたが、シンプルに、「フォーラム検討会議」として命名してみました。それでは、第1回フォーラム検討会議を始めます。

まず資料の確認をします。最初は議事次第です(F1-1)。次に、「原子カムラの境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行」というパワーポイント資料があります(F1-2)。これは、まだ再委託が決定する前のヒヤリングのときに用いた資料です。フォーラムについて詳しく書いた資料になりますので、分かりやすいかなと思い、もってきました。最後に、「コミュニケーション・フィールドの調査」という資料があります(F1-3)。これは、竹中君が整理してくれていて、まだ途中だと思いますが、本日現状を報告してくれるということです。

0. 自己紹介

(木村) 初めに、自己紹介したほうがいいと思いますので、一言ずつ挨拶していきたいと思います。

まず私から。東京大学の木村と申します。原子力基礎基盤戦略研究イニシアティブにご協力いただき、ありがとうございます。原子カムラの境界を越えるという、非常に野心的な目的を掲げて取った研究プロジェクトですので、しっかりやっていきたいと思っておりますので、皆様のご協力をいただければと思います。よろしくお願いたします。

(自己紹介のため、略)

(木村) ということで、今日はこのようなメンバーで話し合いを進めていきます。元気ネットさんは、何名か入れ替わり立ち代りということで、毎回5名くらいの参加をお願いしたいと考えていますので、よろしくお願いたします。

1. 業務の概要説明

(木村) それでは、議事次第に従って進めていきたいと思います。他の話は時間を短めにして、竹中君の話を中心に聞いて、自由討議をしていきたいと思います。

最初に、この前のキックオフ会に参加されなかった方もいらっしゃいますので、簡単に今回の研究について説明したいと思います。資料 1-2 をご覧下さい。

「原子カムラの境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行」が、この研究業務のタイトルになります。スライド 8 に体制表がありますが、今日は、この体制表の、(2)「コミュニケーション・フィールド試行」と(2')「コミュニケーション・フィールドの実施」が合わさった会合という位置づけになります。本業務で行なうコミュニケーション・フィールドは「フォーラム」という名前ですので、「フォーラム検討会議」と呼ぼうかなと思っています。

それでは、簡単に業務の説明をしていきたいと思います。

(スライド 3) スライド 3、スライド 4 は、研究の背景になります。今日は説明を省きますが、要は「原子カムラ」というものが認識されてきていて、どのようにこの「ムラ」を越えていけるのか、という議論をしたいという話です。従来的なコミュニケーションの手法では、これを越えるのは難しいのではないかということで、フォーラムというものを結成して、コミュニケーションすることで、原子カムラを越えるような知見をどうにか見出していきたいというのが、研究業務の大きな目的になります。

(スライド 5) このスライドには、必要性・目的について端的に書いてありますので、少し読みたいと思います。

したがって、現在、「原子カムラ」を内(原子力専門家)から外(市民)から「協働」して、壊していけるような取り組みが必要だということです。従前は、ムラ内をどうすればよいか、またはムラの外がどうなっているのか、という、ダイナミズム(内と外との相互作用)を考慮しない取り組みがほとんどであったというところで、この部分で本研究の新規性もあるということです。

では、「協働」して壊していけるような取り組みというものをどのように考えればいいのかということで、そのためには、市民と専門家が対等な立場で、お互いの間のギャップとはそもそも何なのか、なぜそれが生じたのかを、知識、情報量、経験、社会的立場、価値観、人生観等まで含んだ、お互いのコンテクストを共有して、お互いに尊重することを可能とする仕組みが必要だ、と述べています。

非常に難しいことを言っていますが、専門家、市民という枠組みに入ったところではない、もっと対等な 1 人 1 人の人間としての議論ができるような仕組みが必要なのではないかということです。そういうフィールドを提案したいということです。

本研究では、市民と専門家が対等な立場で、お互いの間のギャップを深く認識し、尊重しあえるようなコミュニケーション・フィールドを提案・試行して、1つは、特に学術的な意味として、2者間の相互作用によるダイナミックな変容のプロセスを明らかにする。2つ目は、このような変容が起こりうる条件を明らかにする。これをもって、今必要とされているコミュニケーション・フィールド構築のための実効的な示唆を得ることを目的とする。こういう示唆が得られたら、少しでも原子力ムラを壊していけるような取り組みに資することができるのではないかということが、本研究の必要性であり、目的であるということです。

(スライド6) 続いて、実施概要も読み上げさせていただきます。

本研究では、市民と専門家が対等な立場で、お互いの間のギャップを深く認識し、尊重しあえるようなコミュニケーション・フィールドを提案・試行し、市民と専門家とのダイナミックな変容のプロセスを詳細に分析する。

具体的には、討論型世論調査の手法を参考にして、市民と専門家に社会調査を実施して、これをベースとしたコミュニケーション・フィールドを構築する。このコミュニケーション・フィールドを「フォーラム」と呼びます。そしてフォーラムを実施して、フォーラムの効果測定を行なうということが、全体の大きな流れになります。

(スライド7) この研究業務は3年間のプロジェクトとして出しています。3年のおおよそのスケジュールがスライド7に書かれています。

このメンバーで取り組んでいくのは、表の右側の欄、「コミュニケーション・フィールドの試行」と書いてあるところです。ここにある項目を、実際に皆さんと一緒に検討していくということになります。

(スライド12) スライド12から先には、フォーラム実施の詳細資料をつけてあります。これは、申請時にフォーラムをどのように考えていくのかということをもとめたものになります。自由討議のときに時間があれば、これを説明しまして、フォーラムというものをどのように作ればいいのかということを議論したいと思っております。

ということで、概要説明としては以上になりますけど、不明点等あれば受けたいと思いますが、いかがでしょうか。

よろしいでしょうか。それでは、後ほど、また質問があればお受けしたいと思いますので、とりあえず先に進めたいと思います。

2. 既往のコミュニケーション・フィールド研究の紹介と整理

(木村) それでは、議題の 2 に移ります。既往のコミュニケーション・フィールド研究の紹介と整理ということで、竹中君にまとめていただきました。竹中君、よろしくお願ひします。

編集注：資料 1-3 の中では、「フォーラム」という単語が 2 つの意味で用いられている。1 つは、一般的なコミュニケーション・フィールドを指す。もう 1 つは、本業務で行なう「フォーラム」を指す。混同を避けるために、この文書では、フォーラムという単語は、後者に対してのみ用いることにした。前者の意味でフォーラムという単語が用いられている場合は、「コミュニケーション・フィールド」という単語に置き換えた。

(竹中) (スライド 1) では、コミュニケーション・フィールドに関する調査報告を始めたいと思います。

最初に、コミュニケーション・フィールドとは何かという話をします。2 つ目に、実際にコミュニケーション・フィールドを構築する際に、どのような段取りで設計をしていけばいいのかをお話します。3 つ目に、従来行っていた手法と本プロジェクトの違いは何か、そしてそれに対してどういう議論が必要なのかをまとめております。

(スライド 2) 最初に、コミュニケーション・フィールドとは何かという話です。

「コミュニケーション・フィールド」という言葉は明確な定義がなく、直訳すると「コミュニケーションの場」になります。ここで、「コミュニケーション」をどう訳すかというのは、非常に難しい問題です。コミュニケーションという言葉は、文脈によっていろいろな意味をなします。

今回は、「専門家と市民の間で行なわれるコミュニケーション」というところに焦点を当てて考えることにします。そのときに、専門的な議論には市民は参加できなかったという背景があります。そうしたときに、コミュニケーションというのは、単純に専門家と市民の間の会話、対話だけではないという背景がありまして、ではどのように考えられるのかといいますと、おそらく、「相手に何かを伝えられる場」ではないか、と考えられます。

(スライド 3) 「相手に何かを伝える」という視点で今までのコミュニケーション・フィールドを見ていきますと、3 種類あるのかなと思います。

1 つ目が、専門家から市民に何かを伝える。これは「情報提供」という形で、新聞、メディアなどが分かりやすい例だと思います。

次が、市民から専門家に何かを伝える。これは、今までは「意見聴取」という形が非常

に多く、アンケートなどで行なわれてきたものです。

3つ目が、情報提供と意見聴取の性質を併せもつ、「対話プロセス」というものです。これが、いわゆる「参加型手法」と呼ばれるもので、例としてはワークショップなどが挙げられます。今回は、この参加型手法にさらに焦点を当てていきたいと思えます。

(スライド4) この表は、今まで参加型手法がどのように分類されてきたかを示しています。参加型手法には、どこに重点を置くかということで、いろいろな様式があります。その中で、この分類ではパブリック・インパクトのレベル、つまりその会合が世間に対してどのくらい影響があるのかという、その影響の度合いを基に分類しています。

一番影響度の低いものは、「情報提供」です。情報提供し続けるところに重点を当てた参加型手法。

次が「意見聴取」です。専門家が行なう分析・意思決定などに市民が意見を言うというもの。

3つ目が「参加」ということで、専門家が市民と協働する。そして「協働」、意思決定に向けて専門家と市民が共同する。最後が「権限付与」、市民の決定を履行する。この「参加」と「協働」と「権限付与」が、非常に違いが分かりにくいと思うのですが、これは開かれた会合がどの程度公式であって、どの程度権限が与えられているかというところによっています。討論型世論調査よりも市民諮問委員会のほうがより公式的であって、影響度が高い。市民陪審投票になると、もうそれが決定事項なので、さらに影響度が高いという、影響度で分類がされています。

このような分類がされてきた背景は、従来型の参加型手法の目的に関係があります。従来型の参加型手法は、専門的な議題に対して、どのようにして市民参加を可能にするか、という目的があったので、この目的に対して市民参加の度合いを基準に分類が行なわれてきました。ただし、このような分類をしたときに、実際にコミュニケーション・フィールドの中で行なわれている内容が見えにくいという問題があったので、今回は違った分類の仕方をすることにしました。

(スライド5) それはこちらになります。コミュニケーション・フィールドの目的別で分類を行いました。左から説明したいと思います。

まず、「情報提供」にも実は2つあるのではないかと。1つ目が、興味を持ってもらうという形のもの。これはサイエンス・カフェという例が挙げられます。サイエンス・カフェというのは、専門家と市民の方が、カフェ形式で、科学的な議題に対して楽しくおしゃべりをしましょうというもので、楽しくおしゃべりをして興味を持ってもらうという形式になります。

一方で、欲しい情報を届けるという形の情報提供もあります。こちらは市民ジャーナリズムというものになります。市民ジャーナリズムというのは、市民の代表の方が新聞記者

のような役割になり、専門家にインタビューなどをして、記事を市民に届けると。それによって、市民の欲しい情報をしっかり届けようという取り組みになります。

次に、「意見聴取」ですが、こちらも2つに分けられると思っています。1つ目は、自主的な意見表明を促す。これは公聴会などが例に挙げられるのですけれども、意見を言いたい人に意見を言っていただく機会を設けるというのが目的になっています。

もう一つが、出てこない意見を聞く。ここではフォーカス・グループという事例を挙げているのですけれども、フォーカス・グループというのは、いろいろな利害関係者がいる中で、それぞれに焦点を当てて、それぞれにしっかりインタビューなどで意見を聞くという形式です。多様な意見をしっかり聞きましょうという目的の意見聴取になっています。

最後に、「参加・協働・権限委譲」です。先ほど3つに分けられたところは、コミュニケーション・フィールドの目的では2つに分けられるのかなと思います。1つ目が、認識を共有する。コンセンサス会議という事例を挙げています。例えば、遺伝子組み換え食品という問題に対して、ここまでは共有できます、ここは共有できませんというのをしっかり分けましょう。そして、共有しているところを、共有しているものだと認識しましょうというのが、コンセンサス会議の目的になります。

次が、共同して何かを創出する。これはシナリオ・ワークショップという事例が挙げられます。こちらは、実際に町づくり計画をしましょうといったときに、お互いに問題を共有して、ビジョンを共有したときに、それに対してどういう行動計画を作るかというところまでやりましょう、という取り組みです。コンセンサス会議は認識を共有するところまでですが、シナリオ・ワークショップはそこから新しい行動計画を作りましょうということで、次のステップの問題になるのかなと思います。

今回はこのように分類しました。ポイントとしては、参加・協働・権限委譲には、ある程度コンセンサスを求められているということです。

(スライド6) では、実際に今回のプロジェクトで、どういう手法を参考にしていけばいいのでしょうか。コミュニケーション・フィールドの目的に対して適した手法というのは、見つかるのではないかと考えております。

ただし、どの手法が最適なのかを判断するのが難しいという問題があります。

(スライド5) 例えば、「認識を共有する」という目的を持ってやりましょうと決まるとします。この表ではコンセンサス会議という事例を挙げていますが、他にもたくさん事例が出てくるわけです。それらの事例の中で、どれが最も適しているのかを選ぶのが、今のままだと非常に難しいという問題があります。

(スライド6) では、その精度をどうやって上げればいいのかということで、失敗している事例を見つけましょうと。こういうケースでこの手法を使うと失敗する、という事例を

集めることによって、選択肢を狭められるだろうということで、現在調査をしているのですが、日本に失敗事例を書いている研究があまりなく、現在こちらの海外の文献を調査しています。なにぶん英語が苦手なもので手間取っているところですので、こちらのほうは、おいおい解説させていただきたいと思います。

(スライド7) 次に2つ目の話題です。参加型手法をどのように設計すればいいかについて、お話ししたいと思います。実践経験が豊富な皆様にお話するのは憚りがありますが…。

今回は、若松征男さんの本を基に、コンセンサス会議、ディープ・ダイアログ、シナリオ・ワークショップという3つの実践例を紹介したいと思います。

(スライド8) 実践例に入る前に、これらがどのように設計されているのか簡単に解説します。これを意識して、それぞれの実践例を聞いていただければと思います

まず、コミュニケーション・フィールドを開くときに、観察者の目的設定があります。つまり、運営側の人たちがどういう目的でコミュニケーション・フィールドを開くのかという問題が最初にあります。

次に、コミュニケーション・フィールドの目的設定。観察者の目的を達成するために、コミュニケーション・フィールドで参加者は何をするのか。参加者の動機付けは何か。

その後、コミュニケーション・フィールドのテーマに関して、運営側の人たちがある程度専門知識を知って、どのような議題の広がり方をするのかを把握しておいたほうがいいということで、テーマ研究があります。

その次に、コミュニケーション・フィールドの正当性を保つために、市民パネルをどうやって選んでいくのかという話が挙がっています。

これらが決まった後に、実際にどのようにワークショップを行なっていくのか、という話につながっていきます。

(スライド9) では、実践例をそれぞれ説明させていただきます。

まず、こちらのコンセンサス会議は、2000年頃に若松さんが開かれたものなのですが、目的は、市民参加を進めるために、日本でもコンセンサス会議が適用できるか確認したいということでした。コンセンサス会議はデンマークで始まったものなのですが、デンマークの人だからできるのではないか、デンマークの国民性が関係しているのではないかという意見もありまして、日本で行なっても大丈夫なのかどうかの確認をしたかったということです。

これに対して、コミュニケーション・フィールドをどうやって設定していこうかというところで、テーマはインターネットが選ばれています。インターネットに対して、市民の考えを含めた報告書の作成をしましょうというところが目的になっています。報告書の内容としては、インターネットに関するコンセンサスにたどり着いたのはどこか。さらに、

その中で提言できるのはどういうことなのか、というところを目的として設定しています。

プログラムの内容は、まず専門家がプレゼンをして、それに対して市民同士で議論をしながら質問項目を作成する。そしてそれに対する専門家の回答を得た後で、もう一度市民同士で議論をしながら、報告書を作成していくという形を取られました。

結論としては、日本でも十分に議論が深まって、適用可能ということだったのですけれども、課題として、専門家と市民の対話の時間が少ないという意見が市民から出ておりません。

(スライド 10) これを受けて、ディープ・ダイアログ、2 つ目の実践例になります。これは、先ほどのコンセンサス会議をどう改良するかというものです。コンセンサス会議の課題であった対話の場の少なさを解決する手法の開発ということで、グループ討論というものを取り入れました。

先にボツの 3 つ目を見ていただきたいのですが、先ほどと違って、プログラムにグループ討論を入れております。専門家から質問の回答を得た後に、専門家と市民と、ファシリテーターを入れて、グループ討論をするというステップを 1 つ入れたということで、対話の時間を延ばそうという目的があったということです。

コミュニケーション・フィールドのテーマは脳死、臓器移植というところに設定されておりました。

結論としては、対話の時間は増えたのですが、それで十分満足できたかというところ、そういうわけではなかったという問題があります。

もう 1 つは、報告書は専門家の意見に近くなったと。こちらは、いいと捉えるか、悪いと捉えるか、非常に難しいと報告されておりました。専門家からたくさんの情報を吸収できたと捉えると非常にいいものかもしれないのですが、市民の独自性が失われたと考えてしまうと、悪いものであるということで、そういう結論が述べられております。

(スライド 11) 3 つ目はシナリオ・ワークショップです。

コンセンサス会議という手法は、比較的日本に広まってきた。ただし、コンセンサス会議イコール参加型手法というような認識が広まってしまったので、コンセンサス会議以外の手法を参加型手法としてやりたいというのが目的にありました。

では、いろいろある参加型手法の中で、なぜシナリオ・ワークショップかといいますと、三番瀬の埋め立てというテーマを扱ったからです。この三番瀬の埋め立てというのは、東京湾の埋め立ての問題なのですが、3 つの市町村がまたがっているところで、利害対立があったと。そういう利害対立があるものに対して、シナリオ・ワークショップという手法は適当なのではないかということで、シナリオ・ワークショップという手段を選んでおりました。

このシナリオ・ワークショップは、コンセンサス会議と何が違うのか。先ほど少し触れ

ましたけれども、コンセンサス会議は共有するところまでなのに対し、シナリオ・ワークショップは共有してから創出というステップを踏んでいるというところが違いになります。

では、この創出はどういうことかといいますと、プログラムのほうで説明していきたいのですが、最初に、専門家が作ったシナリオを 4 つ紹介することから始めました。このシナリオを基に、市民の方々が検討をしまして、どういうところが対立の根本にあるのか、ということを整理しました。そして、では対立問題は置いておいて、共有できるビジョン、つまりお互いになればいいなと思っているのはどこなのか、という話を次にしました。そして、その共有できるビジョンに対して、こういうことをすれば目標を達成できそうだなという行動計画を作ろうと。こういう一連の流れでシナリオ・ワークショップというものを行ないました。

結論としては、このような利害対立がある課題に対して、いろいろな関係者を含めて行なっても、ゆるやかではあるけれども、しっかりと一定の合意を得ることができて、未来像と行動計画を生み出すことができました、ということがこのシナリオ・ワークショップで述べられています。

(スライド 12) このスライドと次のスライドでは、今紹介した 3 つの事例それぞれに共通する注意点などが述べられているのですが、参考資料なので、今日は省略いたします。

(木村) ここで 1 回切ったほうがいいですね。質問がたまっていると思うので、自由に質問をしていただいて、分からないところをなくしてから次に行きたいと思います。

—— コンセンサス会議とディープ・ダイアログとシナリオ・ワークショップで、それぞれ取り上げられた話題が違っていたのですが、結局その会議に参加する人たちは、その話題に対して当事者意識を持った人が参加したということですか？ 市民側の話です。

(竹中) コンセンサス会議では、市民パネルは新聞やポスターで募集をかけています。また、このコンセンサス会議では、いろいろな人を集めたいということで、年齢別と性別でばらけさせて、それぞれのところから 1 人ずつ呼ぶという形で人を呼んでいます。なので、新聞とかを見て興味を持った人が参加者になります。

シナリオ・ワークショップのほうは、対立問題になりますので、いろいろなステークホルダーです。利害対立を持った様々なステークホルダーそれぞれのところから満遍なく人を呼ぶということで、まあ利害関係者なので、非常に参加意識は高い人たちが参加したということになります。

—— 一番身近な問題としては、やはり三番瀬だと思うのです。次が臓器移植などで、そ

れからインターネット、という感じになったときに、例えば三番瀬のシナリオ・ワークショップのときに、最初からゼロの段階ではなくて、最初から 4 つのシナリオが提示されている。その中で、最終的な結論というのは、シナリオのどれかとどれかを合わせたようなものになったのですか。

(竹中) その点は、最後に課題として述べられているのですけれども、シナリオを 4 つ提示した割には、シナリオにあまり関係なく議論が始まってしまったと。最後に課題として、シナリオをどう使えばいいかということを始めに明示しておくべきだった、ということが述べられています。

いきなり、どこが対立していますかと始めるよりも、最初にある程度、こういう可能性が有りますということを見たほうが、どういうところに対立がありそうかということが見やすくなるのかなという考えでシナリオを出しているだけで、最後にどのシナリオがいいであるかとか、そういう話をしていこうというわけではないです。

—— では、最初のシナリオは、最後の行動計画に結びつくものではなかったのですか。

(竹中) ではないですね。全部決まっていなくてシナリオというのはできないと思うのですけれども、この行動計画というのは、ここだけは共有できるという部分に対する行動計画なので、共有できない問題は残したまま話を進めているという形になります。

—— 合意点だけを抽出したと。

(竹中) そうですね。

—— 今のお話の続きで、4 つのシナリオというのは、主催者側が事前にワークショップなどをしながら作ったのですか。

(竹中) そうです。専門家のワークショップなどを開きながら、シナリオを作ったということです。

—— そうすると、シナリオを作る段階では、市民の意見は全然入っていない。

(竹中) 入っていないです。

(木村) よく分からないのだけど、課題として出ているのだからそうなのだろうけど、シナリオを作る意味がないですよ。

(竹中) そうですね。

—— 私も、最初にどうして 4 つのシナリオがあるのかが不思議だったのです。シナリオというのは、ワークショップをした後に出てくるものではないかと思ったのです。このシナリオ・ワークショップというのはそういう手法なのかなと思って、お聞きしたかったのです。

(竹中) シナリオ・ワークショップは、意味合い的には、行動計画を出すことがメインで、そこから命名されています。

専門家が最初に導入として専門的な情報をプレゼンテーションするという点に問題があるという議論だと思うのですが、最初にどのように導入すればいいかというところで、だいぶ悩んだのだと思います。利害関係者がいきなり話を始めたときに、どうなるかが想像できなかったということで、このステップを入れたのだと思うのですが。

—— 1点だけ。市民参加というのですけれども、私も長い間、市民との対話集会をずっとやっていたのですが、「市民」といって来ている人が、本当にニュートラルかという、今までにほとんどそういう経験がないのですね。必ず何かの考え方とか、何かに入っている人たちが来ます。

例えば、最初に基調的なレクチャーをしたりしますよね。発言する人は、例えばどこかの大学の講師とかが、自分の発表をしているわけです。それを聞いていて、市民かなあと。ものすごいロジックを持って、考えで説明するものですから、一般の市民から離れているような感じがするのです。今回も、どういう形で「市民」と捉えるかというのは、大事ではないかという感じが、私はするのですけど。

1つだけ例を言うと、昔、木元教子さんがずっとやっていた市民懇談会に、何ヶ所か行ったことがあります。市民の方が発言をするのですけれども、だいたい発言をする人は、何かの団体とか、何とかに反対する会の代表者の方でした。本当に市民なのかと、いつも疑問に思うのですよ。

今回も、市民をどのように捉えるか、定義するかというのは、難しいかなという感じが少しするのです。

—— 今の発言に対してひとつ。市民がニュートラルというのはありえないと思います(笑)。

—— ところが、よく言うのですけど、統計をやると、推進、反対の 15%ぐらいが意見があるのだけど、真ん中の人は声なき声だと言うわけですよ。そういう人たちはほとんど発

言しなくて、見ているのではないかという感じが私はしているのです。そういう人たちが団体とか、組織として行動するのは、なかなか難しいのですよね。

(木村) 今回のフォーラムで、市民をどのように考えていくのか。少なくともこの研究では、専門家と市民という 2 項対立を結局のところは持ち込んで、シンプルに仕上げたというところがあります。その中で、ニュートラルではありえないし、ばらばらな市民という存在をどうやって 1 つの属性として分析していくかというところは、少し議論を進めなければいけないかなと思います。

—— 全然ニュートラルとは思っていないのですが、今先生がおっしゃった通り、どのように市民を捉えるかは、大事なのですよね。

(木村) そうですね。そこを工夫していかないといけないので。その辺も、このフォーラム検討会議ではやらなければいけないかなと思います。

他はいかがでしょうか。

—— スライド 2 に、専門家と市民のコミュニケーション・フィールドというのは、相手に何かを伝える場と書いてありますが、相手というのは、相互ということですよね。

(竹中) そうです。専門家と市民の双方。

—— 双方が相手に何かを伝える場ということですか。

(竹中) そうですね。「専門家と市民の間」と呼ばれたときは、そのようになるかと思えます。

—— そうすると、今いくつかご提示いただいたワークショップなり、コンセンサス会議というのは、双方が、相手に何かを伝えられた場になっているのでしょうか。

(竹中) 最初に情報がないままの市民では、議論がまとまらないだろうという前提から入っていて。そこで、しっかり情報を与えたり、質問に答えた上で、市民が作り出したものがあって。それが、専門家が意思決定する段階に入ったときに、参考できるものになるようにしたい、という形になっています。

これはまだ実験段階ですので、シナリオ・ワークショップは報告書を作って終わりですけども、本来はその報告書を、専門家が、ではそれを行政でどのように活かしますかといったときに、参考にできるようにしたいということが目的になっています。

(木村) 今の質問はそういう意味ではなくて、単純に、コミュニケーション・フィールドという定義をしたときに、双方向に伝えているものとして、今回この整理をしたのですか、という話です。

例えば、情報提供や意見聴取というのは一方方向なので、コミュニケーションの本来的な定義とは違うのではないですか、という指摘だと思う。

(竹中) ここですか。

(木村) 相互という意味は、どういうことまでを相互と言っているのか、という話だと思う。

—— 私も同じような印象を持ちますね。相手に何かを伝える場。例えば教室で先生が生徒にレクチャーをする。それは、知識を生徒に伝えるということですが、それもコミュニケーション・フィールドというのか。

(木村) という質問。

(竹中) なるほど。既存の分類では、参加型手法の中に、そういう形のものが入っています。

—— 私がこの質問をした背景のひとつとして、提案書の中に「信頼」という言葉が出てくるのですよね。専門家が市民の信頼を獲得する、ということが入っています。

先日、ある討論会に参加させていただいたときに、一番印象に残ったのは、「伝えることではなくて、聞くことなんだ」と。相手が何を聞きたいかを聞く、ということなのだ。

それで、今回のプロジェクトの創造性ということ考えたときに、そこを少し組み込めるといいのかなと、個人的に思っているのですけど。

(木村) おそらくそれは、竹中君のプレゼンの3番で、この後、どのように考えるのかという議論が出てくると思います。

「コミュニケーション」の定義の仕方ですが、私の中ではコミュニケーションというのは、単に「情報に流れがある」程度なのです。

だから、先ほど例に挙げられていた「授業」も、先生から生徒に情報が流れたので、そういう場はコミュニケーション・フィールドとして認識しておいてもいいだろう。だから、情報が流れる場は全てコミュニケーション・フィールドと一応定義した上で、でもその中で、どういう種類のフィールドがあり、どういう特性をそれぞれ持っていて、今回のコミ

コミュニケーション・フィールドとしては、どういう知見が使えるのか。その辺りがうまく整理できるかというのかなというところですよ。

ですから、情報提供というスタイルのフィールドもあるし、情報聴取というフィールドもある。そして、参加型手法というフィールドもある。そして、情報の流れを見てみると、スライド 3 の図のように、情報提供だと、従来的には専門家から市民への情報の流れがある。意見聴取だと、市民から専門家への情報の流れがある。参加型手法だと両方向がありますね。そのくらいの簡単な分類をここではしているのかなと思ったのですが。

それから、スライドの中に「フォーラム」という単語が出てくるけれども、ここでいう「フォーラム」は、何を意味してフォーラムと言っているのですか？

(竹中) 非常に曖昧なまま使っていますね。

(木村) コミュニケーション・フィールド一般のことをフォーラムと書いているでしょう。

(竹中) そうですね。

(木村) それで私は、ここで1回切ったのですよ。3に行く前に、それを整理しておかないといけなくて。ここまですべて出ているフォーラムという言葉は、コミュニケーション・フィールドという意味のフォーラムなのです。そして、3から先では、もしかすると、我々がやろうとしている「フォーラム」が出てくるかもしれません。

—— コンセンサス会議のときに、専門家と市民の対話の時間が少ないということが課題になっていましたよね。それで次のディープ・ダイアログで、専門家とグループ討論をする時間を設けたと。それでも市民は対話の時間に満足していないと書いてあります。これは、質とか内容に満足していないということだと思うのです。そして、報告書が専門家の意見に近くなったとなっていますよね。

そうすると、次の段階をとらないと、専門家の人はどう思っているか知らないけど、市民は、対等にものを言って、自分たちの考えを入れてもらえるようにならないということなのではないでしょうか。

(竹中) そういう可能性があるなというのは、調べていて非常に感じていました。それは3番目の話題で少し触れようかなと思っているのですけれども。

—— 報告書が専門家の意見に近くなったのは、どうしてだと思いますか。専門家とグループ討論すると、専門家の意見に市民が納得してしまうということですか。近寄ってはい

くけれども、やはり専門家のほうに近寄ってってしまうということなのでしょうか。

(竹中) そうですね。専門家のほうに近づいていくということだと思います。

(木村) 同じような質問ですけど、「満足していない」というのは、具体的にどう満足していないと書かれていたのですか？

(竹中) そこは簡単なアンケート調査の中なので、そこまでしっかりした「満足していない」という指標があるわけではありませんでした。

(木村) 自由記述を取っているわけでもなく？

(竹中) ではないです。

(木村) 今回読んだ中では、時間が満足されるものではなかったという、それくらいしか分からないということですか。

(竹中) そういう意見が出てきた、ぐらゐの感じですね。

(木村) それこそ、単純に質があまり満足できるものではなかった、程度の課題しか出てきていないわけですね。

—— そうかな。私は違うと思うのですよ。よく NHK のドキュメンタリーなどで、ある謎が番組の最初に提起されて、いろいろな研究者の成果が説明されて、最後に「ますます謎が深まりましたね」と、そういうパターンで終わることが多いわけです。

つまり、勉強すればするほど、疑問は広がっていくものだと私は思うのですよ。だから、グループ討議をして、専門家からたくさん情報をもらえばもらうほど、もっと知りたいなという気持ちがわいてきて、それで時間に満足していない。なるほど、そういうことかなと思って、先ほどはお聞きしていたのですよ。まあ、違うかもしれませんけれども。

(竹中) どちらかという、そのニュアンスに近い書かれ方をされていました。もっと聞きたいことあるのに、というニュアンス。

—— そうすると、最後までそうなるっていくのでしょうか。もっと、もっと聞きたくなっていく。

—— 専門家になりきれないと駄目かな。

—— 最終的に専門家になってしまうんじゃない？

—— 入り込めば入り込むだけ、今おっしゃったように、専門家と同じようなレベルに、どんどん入っていくのですね。反対派といわれている人たちの中にも、そういう性格の人で、勉強している人もいっぱいいるのです。

面白いと思うのは、原子力反対の立場を取っているマスメディアの人が、私の教室によく取材にお見えになるのだけど、よく勉強されているのですよ。その人の話を聞いていると、まるで我々と同じポジションで仕事をしている人かのごとく話されるのですね。だから本人も、30分に1回ぐらい、「いや、私は反対の立場なのですよ」とおっしゃるのです。30分に1回のそのセリフを聞かないと、どういうポジションの人かわかんなくなってしまうくらいよく勉強されていて。本人もだから、会社が反対のポジションを取っているから、そういう記事になっているからということをおっしゃっているだけで、言っていること、あるいは勉強していることは、我々とそんなに違わない。

だから、どんどんそういうところに入っていくのではないかという気がするのです。それは悪いことではないと私は思っています。私は、2項対立で物事を扱うのはあまりよくないと思っています。推進派、反対派という捉え方には疑問を持っているので。

知れば知るほど、皆悩んでいるわけです。専門家と称する人たちだってそうです。だから、そういうところでどんどん入り込んできて、一緒に悩めばいいのですよね。

先ほどのシナリオ・ワークショップの話などは、最初にシナリオを提示して、参加した人たちと一緒にディスカッションをして、どういう方向に行くのがいいのでしょうかということ、ビジョンを共有する。これは一番、私は、自然な流れのような気がします。最初に提示したシナリオが忘れられたというのも、非常によく分かるような気がします。

(木村) 質問が戻ってしまうのですが、満足していない理由は詳しくは書かれていなくて、もっと聞きたいことがあるみたいなニュアンスは書かれていたと言っていたけど、他にはどういうニュアンスが書かれていましたか。

(竹中) 他にはないです。

(木村) もっと聞きたいことがあるのに終わってしまったので、満足していない、と書かれていたということですかね。そこは結構重要なポイントで、課題が具体的になればいるほど、どう対応すればいいかが分かりやすいので、確認したかったのだけど、ここはどうなっていますか。

(竹中) いや、まだまだ時間が足りないというような感じです。

(木村) まだまだ時間が足りない。量が足りないということですね。

(竹中) 量が足りない。まだまだ議論したい、という意見が聞かれているというような書かれ方をしています。

(木村) では、満足していないというのは、時間が足りないということ。

—— それは、エンドレスではないでしょうか。1回やって足りない。それで3回やる。3回やってもおそらく、もっと不満足感が増していくような気がします。本当は、どういう意味で不満足なのか、詳しく分析するといいいのですが。

(木村) 例えば、信頼を組み立てていくような対話をするにはどうすればいいかとおっしゃっていましたが、「満足」の指標の中に「信頼」みたいな項目があったときにどう評価できるかというのは、全然違う結果が出てくる可能性がある。

—— 専門家のプレゼンが下手で、満足していないという意味なのか、とか。いろいろな意味はありえるのですよね。

(木村) 他はどうですか。私は細かいところで質問がたくさんあるのですが、聞いてもよろしいですか。

スライド4で、討論型世論調査が参加に分類されていますが、これは本当ですか。

(竹中) 今までの分類では、参加に分類されているのです。私も、討論型世論調査が参加というのは、非常に疑問ではあるのですが、分け方としては、ここまでは違って議論しているということで、参加のほうに入れられています。

(木村) ということは、「参加」の欄にある、「専門家が市民と協働する」という書き方がおかしいのですね。

(竹中) そうですね。おそらく、協働と参加の分類が難しいというのはそこもあって、「参加」はかなり数居が低いのだと思います。

(木村) スライド5に、「意見聴取」で「出てこない意見を聞く」があるでしょう。討論

型世論調査はだいたいこの辺りなのですよ。

(竹中) 私も、討論型世論調査はここだと思います。

スライド5で、「参加・協働・権限委譲」以降はコンセンサスが欲しいと書いてあるのですけど、実は分類をした中で、コンセンサスがなくて、参加・協働・権限付与の中に分類されるのは、討論型世論調査だけなのです。ですから、討論型世論調査を、ここに入れていいのかどうかは、非常に疑問ですけれども、従来はここに分類されています。

(木村) この従来の分類をしたのは、誰ですか。

(竹中) 2000年に、International Association for Public Participation から出された表を基にしています。

(木村) その表自体に討論型世論調査が入っているわけですね。

(竹中) そうです。

—— スライド4の「参加」というところには、「専門家が市民と協働する」と書いてあります。「協働」のほうは、「専門家と市民が共同する」。「きょうどう」のフレーズが混在していますよね。

(竹中) そのまま移した表なのですが。元々は外国の分類なので、日本語の訳をどうするかという問題もあると思います。

—— 原語で書いたほうがいいのではないですか。

(木村) それは後で調べておいてください。おそらく、原文を読まないの意味が分からないでしょう。

Deliberative Polling は、基本的には調査の一環ですからね。ただ、普通に調査をすると、何も知らなくて雰囲気丸をつけてしまう人が多いので、きちんとした意見になるように、そういう分布を知るために、ある一定の情報提供をして、考えられるような素地を作って、それから調査をしますというのが、単純なコンセプトですから。あまり、「協働」とかではないですよ。単なる調査としか思えない。意見聴取だったら分かるかな、ぐらいの感じですよ。

—— 革新的エネルギー・環境戦略をまとめるときに、3つのオプションを提示して、討論

型でやりましたよね。あれはいろいろな議論を呼んでいて、あれを調べるのも面白いですよ。この前、当事者から詳しく話を聞きましたけれども、当事者は自画自賛して、良かったと言っているけれども、世の中では相当批判がありますよね。あれはまさに討論型世論調査を大々的にやったわけです。

(木村) そういう意味では、適していない例を挙げている研究は国内には少ないと書いてあるけれども、今回の討論型世論調査に関しては、いろいろな批判があるから、それを調べれば結構出てくると思いますね。

—— その調査には、25%を選択する人なんて、ほとんど参加していないわけです。ああいうところに参加するのは、ほとんどが0%を選択する人に偏っているわけです。だから、先ほどメンバーの選び方でコメントされていましたけれども、そういう「プロ」の人が参加しているような傾向にありますね。

(木村) そこで、限界みたいなものがある程度整理されてくるといいですね。討論型世論調査という手法の中でこういう課題が出てきたのだから、今回フォーラムを作るときにどの辺を気をつければいいか。そういう議論が出てくると思うので、そこは調べてもらおうと助かります。

—— シナリオ・ワークショップのところで、先ほども話が出たのですけれども、シナリオを4つ紹介するというのがありましたよね。これは、専門家の責任として作るのですか。それに対して、市民側から質問をしていくという、そういう方法ですか。

(竹中) そうですね。

—— 先ほど、3つの市町村にまたがっていると仰いましたよね。シナリオは、そういう人たちが作るのですか。それとも、プロジェクトを運営している組織が作るのですか。

(竹中) プロジェクトを運営している組織が作ります。

—— それに対して、3つの地域の方々が、いろいろ意見を言うと。

(竹中) はい。

—— 市民参加型ならば、市民が考えるシナリオもあってもいいのではないかと思うのですよね。自分たちはどうしたいのですかと。

言いたいのは、原子カムラをなくしましょうというときに、原子力側だけがシナリオを提案するのですか。例えばですが。

(木村) いや、それはしないようなものにしようとは思いますが。そういうことではないですね。

—— 違いますでしょう。そうすると、イニシャル・コンディションをどうするかですね。先ほどは、結局シナリオと関係なく話が進んだとおっしゃっていましたが。

(木村) おそらく私が思うに、若松先生もいろいろな経験がおありですけれども、どう導入しようかと悩んで、まあ、シナリオを入れてやってみるか、とやったのだと思います。そして、失敗した。そういうことだと思います。

私が気になるのは、「検討、対立の整理」と書いてあるけれども、ここを誰が仕切って、どのようにしたら次につながっていったのか。その辺りを若松先生はどのようにまとめて書いているのか。もう少し詳しい情報が知りたいのですよ。その辺りについては、次の情報提供の機会の際にお願いできますか。

おそらく、コンセンサス会議、ディープ・ダイアログ、シナリオ・ワークショップなどは、今回フォーラムを検討していく際に参考になる事例だと思います。だから、もっとテクニカルな面まで含めて調べて欲しい。時間をどのくらいとったのか。専門家を何名用意したのか。そういうテクニカルな条件がどうなっていたのか。そして、どの条件がうまくいって、どれがうまくいかなかったのか。かなり細かい情報まで調べてもらえると、具体的な立案の参考になってくるので、その辺りを今度お願いしたいと思います。

他に、こういう観点の情報がほしいとか、ありますか。何かあれば、竹中君に調べていただこうと思いますが、いかがでしょう。

—— 直接関係ないかもしれませんが、例えば高レベル放射性廃棄物のことなども、長年クローズであったり、いろいろなタイプがあったとは思いますが、市民や専門家の意見を聞くチャンスがあって聞いてきて、いろいろ調査・研究をされてきたと思うのですけれども、そういうことを次の段階にどう活かしたのかということが、市民の側にまったく見えないのです。いろいろなパターンをやりながら、どのようにそれを見せていくのか、次にどのようにつなげていくのか、みたいなどころまでの検討は、最初の段階ではされていたと思うのですけれども、それがどうして見えなくなってしまうのかなと。

(木村) 今のお話は、竹中君の発表の、3番目の議論の1つのトピックになっているはずです。そうしたら、少し続きを話してもらって、またディスカッションしていきましょう。では、3番目から、どうぞ。

(竹中) (スライド 14) はい。ということで、3 番目、今までの手法と本プロジェクトでどういう違いがあるのか。その異なる点に対して、本プロジェクトでどういうことを議論していかなければいけないのかという点をまとめました。

異なる点として、大きく 3 つ挙げさせていただきました。1 つ目がプロジェクトの目的。2 つ目が参加者。3 つ目が対話プロセスということで、紹介させていただきたいと思います。

(スライド 15) まず 1 つ目、目的です。

従来型の大前提の目的（観察者の目的）は、いかにして市民参加を可能にするか、となっています。それに対して、今回のプロジェクトは、専門家と市民の相互作用を見たいと書かれていますけれども、この根本にあるのは、専門家と市民が対等の立場で、どのように参加するのか。これが目的になっているので、従来型は市民だけで、本プロジェクトは専門家が入ってくるので、少し目的が変わってくるということがあります。

従来型は、コミュニケーション・フィールドの目的を、市民の意見を含まれたものを作り出しましょうとしています。そして、参加者の動機としては、自分たちの意見が反映されるということになります。

一方、本プロジェクトで、観察者の目的に対して、どのようにフォーラムの目的を設定するのか。また、今回は市民と専門家、両方が参加者になってくるので、この人たちにどのような動機付けをするのか。そういうところを考えていかなければならない。ここがまず 1 つ目の違うポイントだということです。

(スライド 16) 2 つ目は、今も言いましたけれども、参加者が変わってきます。

今までは市民だけが参加者だったのですけれども、今回のプロジェクトでは市民と専門家の両方とも参加者です。そのときに、どのようにして市民を公平に選ぶのか。どのようにして専門家を公平に選ぶのか。

市民を公平に選ぶという点に関しては、今までも非常に悩まれているポイントで、やはりしっかりとした答えは出ていないと思います。

さらに、専門家の選び方というのは、今までに事例がありません。今までは、市民に信頼されやすそうな人を恣意的に選んでいたということで、今回は、ちゃんと正当な理由が必要で、公平性をもった専門家の選び方をしなければいけない。どのように参加者を選ぶかということが、2 つ目に大切なのかなと思います。

(スライド 17) 3 つ目も、先ほど皆さんからご指摘いただいたところなのですが、対話プロセスと書いております。

今までの対話プロセスは左の図のようになっていたと思います。双方向の矢印が書いて

あるのですけれども、基本的には情報提供という形と、質疑応答という形がメインになっています。そうすると、情報提供は専門家から市民に情報を出すわけですし、質問応答というのも、市民から専門家に出されているのは質問であって、専門家からは答えが出るということで、基本的には専門家から市民に情報が流れていることになります。こういうプロセスをメインに使っていくと、専門家と市民がしっかり分かれてしまう。むしろ、そういう構造を明確化してしまうというところが、従来型のポイントとしてあると思います。

それに対して、今回のプロジェクトでは、市民と専門家が一緒に参加しようとしている。そういう取り組みをしようとしている中で、今までと同じようなプロセスだけでできるのか、というところを話さなければいけないのではないかと。では、それを変えるとしたら、どういうものを取り入れていけばいいのか。今までの片方向の情報の流れだとしっかり分かれてしまうので、どうしたら双方向に情報が流れるようにできるのか、そういうことを考えていかなければいけないと思っております。

(スライド 18) ということで、以上で発表を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

最後に、今回のプロジェクト名は「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行」ということで、非常に長くて、パワーポイントの中で使いにくい、何とかこのプロジェクト名の略称がほしいということで、いい案があれば、ぜひお願いします。

ありがとうございました。(拍手)

(木村) ということで、3番では、今回フォーラムをどうやって設計をしていくのか。そのためにまず、どこが従来型と違うのかという辺りを、彼なりにまとめてもらいました。そこについて質問をもらって、そのまま自由討論に入っていきたいと思っております。

私の中ではキーワードとしては、従来、「市民参加」がずっと叫ばれていたのだけど、いかげん「専門家参加」しようよと。そこがキーワードかなと思っっているのですね。

どうしても、専門家がいつも壇上に控えていて、そこに情報を聞きにいくと。情報の偏りがあるので、聞きにいくというスタイルがあるのですけれども、専門家側が実は、意思決定プロセスに、参加しているようで参加していないのではないかと。そういう気がしているのです。だから、意思決定は専門家がするものではないという前提に立つと、では専門家は、意思決定にどのようにコミットするのでしょうか、というところがまったくなくなるにも関わらず、今まで専門家は、でも意思決定の中に、知らないうちに歯車に入ってしまったから、もうそれで参加しているんだよ、みたいな感じのところ、私は最近違和感を持っている。もう少し、専門家というものの意思決定に対する役割を明確化して、ちゃんと参加するというのはどういうことなのか考えるというのは、大きなチャレン

ジではないかと私は思っているのですね。

なので、今回、参加者のところで、市民プラス専門家と言っているところは、私の中では大きな変化なのです。

—— スライド 15 で、観察者の目的は「専門家と市民の相互作用」だけど、参加者の動機は「市民＋専門家」と書いてあって、市民が先になっているのは、何か理由があるのですか。やはり市民を重要視しているからという意味ですか。

(竹中) いや、あまり気にして書いたところではないですね。やはり前と後ろでイメージが違うということでしょうか。

—— だいぶ違うような気がしますね。普通は、順序が変わったということは何か意味があるかなと思いますね。

(木村) 従来型は、専門家が含まれている何か体制みたいなものがあって、そこに市民が突入していくという意味ではないですか。そうではなくて、そういう体制とは別に、専門家が出てきて、市民が出てきて、何か作りましょうよというのが、今回の提案ではあるのです。

(竹中) そういう意味でいくと、前と後ろで意味が違う、と捉えてしまうとまずいのですよね。どちらで書いてあっても同じような意味合いですよ、というところが欲しいのですけれども。どうしても前に来たほうが重要そうに見えてしまいますよね。

(木村) 例えば社会調査グループのほうだと、中心的な分析の主体は専門家にするほうが、今までにない議論ができるし、実はそちらのほうが重要だという意識は強くありますね。市民のほうはどう変わっていくかというのは、いろいろなところでなされているので。そうではなくて、専門家がどう変わるのか知りたいというのが、彼らのモチベーションなのですよね。

—— そうすると、スライド 16 の表は 2 番目のところからは未定になっていますが、今木村先生が言ったことが目的になるのですか。専門家がどのように変わるか、とか。

(木村) うーん、ただ、それをここで謳ってしまうと、違う気がするのですよ。

—— ちょっと見ていて気持ち悪いのですよ、あそこ。

(木村) まさに、未定と書かれている部分をどうするかを、今日ディスカッションしなければいけないのです。

それから、スライド 16 の参加者のところで、公平性という言葉を書いていたけれども、公平性というのはあまりに難しすぎるので、正当性と書いてあるのだから、正当性でいいと思います。ここの、専門家をどう選ぶのかということを考えていくのも、このグループが中心になってやっていくことになります。でも、おそらく目的の未定の部分が埋まらないと、どう選ぶかというのも見えないのですね。

17 ページの対話プロセスの話は、両方とも参加型ではあるけれども、実は参加型といいながら、情報が偏って流れているのですよ、ということを行っているのですよね。

(竹中) そうですね。今までと同じようなプロセスだけだと、変えるのが難しいのではないか、というところですよ。

(木村) 竹中君の発表について、他にご意見はありますか。それでは、少し私の資料を軽く説明をしてから、自由にディスカッションをしていこうと思います。よろしいですか。

では、どうもありがとうございました。(拍手)

3. 自由討議 (配布資料 1-2)

(木村) それでは、今の議論に関連するのですけれど、私が申請時にフォーラムについてどのように考えていたかを、資料 1-2 を使って紹介したいと思います。スライド 12 から先になります。

(スライド 13) このプロジェクトではフォーラムを実施することが一番重要なポイントになるのですが、このフォーラムをどうやって実施していくかということに関して、4 点くらい議論しなければいけないポイントがあるだろうと、申請時には書いています。

1 番目は、構成人員をどのように選択するか。2 番目は、話題をどのように設定するか。3 番目は、実際のフィールドでのコミュニケーションをどう導くか。4 番目が、フィールドの公正性をどう保証するか。この 4 つを検討して、一応まとめていました。

(スライド 14) 1 番目、構成人員をどのように選択するか。

申請時には、討論型世論調査の手法を参考にして、構成人員を選択できるのではないかと書いています。細かい字は省きますけれども、下のほうに書いてあるように、具体的には、市民および専門家に対して調査を実施して、フォーラムへの参加を承認してくれた回答者のうち、原子力に対する賛否、安全に関する考え方を考慮して、原子力に対する考

え方のバランスが取れるように選出して、フォーラムメンバーとすると書いています。

ただ、このときはこのように書いていますけれども、今回の議論を踏まえて、正当性というところで、これで本当にやりたい目的が達成できるのかどうかという議論はまだ残ると思います。これは参考情報として捉えていただければと思います。

(スライド 15) 次に、話題をどのように設定するか。

これは竹中君のプレゼンでは出てこなかったですけど、参加者がこのプロジェクトにどういうモチベーションで参加してくれるのか、という議論に関わるところです。その点が抜けてしまったね。

(竹中) ちょこちょこ、細かくは書いてありますが。

(木村) モチベーションをどう確保するか。要は、どういう議論をすれば、参加者は参加しようと思えるかということで、申請時はひとつの解として、「原子力における安全の考え方」を挙げています。

なぜこれを選択したかということ、世論調査で、市民と専門家のギャップが最も大きいもののひとつであったということ。それから、福島事故後の市民参加のワークショップ等で、専門家の説明に対して、市民から「安全ということではなくて、リスクを示してほしい」という意見が多く聞かれていたということ。あとは、「安全」とは科学技術のみで決められるものではないのではないかということです。細かいところにはそういうことが書いてあります。

例えば、ALARA (As Low As Reasonably Achievable) とは、合理的可能な限りリスクを低くするという概念で、従来から言われている安全の確保のひとつの概念ですけども、この Reasonably Achievable というのは、科学技術者のみでは解決できないものです。Reasonably、合理性と言った場合、科学的合理性もあるけれども、社会的合理性もあって、それを両方とも達成可能な範囲で考えなければいけないということで、すでに科学者だけでは解決しないものです。その認識そのものが、もしかしたらずれているのではないかと、こういう議論を選んだらどうか、と提案しました。

したがって、安全についての議論は、市民と専門家が、お互いに別の領域についての情報を多く持っていると考えられ、市民と専門家のギャップを越え、原子カムラを壊していくためには適切な議題なのではないかと、申請時にはこういうもので提案しています。

ただ、フォーラムの設計時において、十分な検討を行なうと書いてありますので、必ずしもこれに縛られる必要はありません。フォーラムの目的を適切に設定して、その中で議題をどうするかということは、今後決めていけばいいと思います。が、一つの案として、こういうものを一応設定していました。

(スライド 16) 対応 3、コミュニケーションをどう導くか。

フォーラムのファシリテーターが重要。元気ネットさんをお願いしたのは、このためにです。事前の打ち合わせを重視。フォーラムの設計とか、調査票の設計にも影響してきますし、メンバー選定、メンバーへの準備を入念に行なうということです。そういったことを今年度は検討するということになります。

(スライド 17) 対応 4、フィールドの公開性というところですけども、ここに書いてあるのはすごくテクニカルなので、別のスライドで説明したいと思います。

(スライド 11) スライド 11、信頼性の確保というところになります。

メンバー選択の公正性、入念な準備、それからホームページを用いてフォーラムの公開性を確保するというので、信頼性を確保しようとしているということ。ここにもテクニカルな話を書いてありますけれども、この取り組み自体の信頼性を高くするために、このフォーラムの情報をどうやって出していくかということは、今後議論しなければいけない1つのポイントかなと考えております。

ということで、あまりまとまりがないのですけれども、こんなことを申請時に考えていましたという紹介でした。ここに書いてあることに関して、何か質問があれば、まず受けたいと思います。

—— 「原子カムの境界を越えるため」が、研究テーマの頭にありますよね。このことと、フォーラムの話題をどのように設定するか、ということのつながりは、どのように考えたらいいですか。

(木村) つながりはないです。話題はなんでもいいのです。ただ、専門家だけでは決められないことだな、という議論を持ってこない、専門家と市民のお互いのリスペクト関係が作りにくいのかなと思っているところがあるので、そういう議論をしたいということです。

この前のキックオフ会ときには、例えば土田先生からは、5回フォーラムを開くので、最初の2回くらいは、原子力とは関係ない話をして、お互いに1人の人間として、ああ、皆一緒ですねという、そういう確認から入ったらどうでしょうか、みたいな話もありました。そういうことも含めて考えてもいいかなと思っています。

ただ、さすがにまったく原子力の話をしなないとすると、それは問題があると思いますが。そういう中でも、ちゃんと意見が入り乱れることができるような話題を設定したいということです。そういう話題を設定して、一緒に考えることを支援することが、ある意味ムラの境界を越えるということにつながる。そのように考えています。

—— それから、ALARA が出てくるのですが、Reasonably Achievable というのは専門家でも難しいので、市民の方々も考えるのが難しいテーマだと思います。ほぼ同じことを指しているのだけれども、How safe is safe enough(どこまで安全ならば安全といえるのか)。そのほうがまだ分かりやすいかなと。

(木村) ありがとうございます。確かにそうですね。

—— 本当に一般市民の感覚から言うと、例えばスライド 15 に出てくる「リスク」という言葉でさえも、正しく理解している人は、自分も含めてかもしれませんけど、すごく少ないなと思っているのです。

—— 危険性とかね。

—— 全て危険なこと、という理解している人が多いと思うのです。

(木村) そうですね。

—— ですから、普通の日本語として皆が分かっているだろうと思っていることさえも、分からない人が実は結構多いよ、ということ、専門家の方にはよくよく認識していただかないと。ARALA とか言われても、「はあ？」みたいなのが普通なのですよ。

それから、スライド 14 に「原子力に対する考え方のバランスが取れるように」とありますが、バランスを取るというのは、10 人のうち賛成の人が 5 人で、反対の人を 5 人とか、そういうことですか。

(木村) それも決めていけばいいと思います。500 人に対して世論調査をします。項目は、たくさんあるのですね。そのあらゆる項目に対して、いろいろな分布が出てくるので。例えば、賛成、反対だけではなくて、どちらかといえば賛成、どちらかといえば反対という意見も出てきます。ものによっては、将来的には駄目だけど、今はやらざるをえないとか、そういういろいろな意見分布が出てきます。そういう分布を総合的に見ながらということなのですが。

実は、どういう質問をすれば、バランスが取れるようになるかということも、ここで少し議論しておく、市民調査グループに、「こういう項目を入れると、フォーラム検討側としてもメンバー選定がしやすい」みたいなことが言えるのですね。

—— それは、実施する主体がバランスが取れていると思うよりも、社会的に見てバラン

スが取れていると見えることのほうが大事ですよ。

(木村) そういう認識で大丈夫ですか。

—— と私は思います。

—— 同じような質問ですが、そうすると、誰が、社会的バランスが取れていると判断するわけですか。

—— また原子カムラの人たちが、都合のいい人たちを集めて、都合のいい調査をしている、と思われたいような選び方をしなければいけないということでしょう。私もそう思いますね。

(木村) その場合、どういう選び方になるといいのか、ということですよ。結構難しい。

—— だから私は、アンケート調査の回答をまったく使わないほうがいいような気がします。

—— ただの抽選みたいなことですか。

—— そう。ランダムに選ばないと。そういうバイアスをかかった人を積極的に選ぶのは、いかがなものかと。

(木村) ただ、500名とか数が大きければランダムにするほうがいいのですが、10名だとランダムというのはランダムにならないので。難しいところです。討論型世論調査は、調査が1000名規模で、会合に参加する人が100名規模なので、それならある程度ランダムになるのでしょうか。今回の場合は、かなりコミットしてもらうことになりますから、数を少なく絞ったのです。10名まで絞りますから。

—— 事故前ならともかく、事故後は、ランダムにやったら原子力推進の人が選ばれる可能性はほとんどないかもしれませんね。

—— でも、そこなのですが、世の中で、反対とか、ゼロとか言う人の声は大きくて、そういう人たちが多いうように報道もされているし、そうかな、とも思うのだけど、私の身近では意外と、働き盛りの年代層の男性の人は、必要でしょうと言う人が多いのです。世

の中で思っているほど、皆が反対ばかりとも限らないのではないのでしょうか。だから、そういう人たちも入るようなバランスが必要なのではないかと思います。

(木村) 分かりました。それは意見として聞いておいて、他に何かございますか。

—— 信頼性の確保に関して、市民は本当にいろいろな人がいると思いますけれども、やはり専門家の場合ですね。特に原発事故以降、週刊誌に何か記事を書いたり、現地に入って、子どもに対する放射線の影響とかを、不安をかきたてるように話されている方もいたと思うのです。

元気ネットで勧められて、読ませていただいた本で、それは毎日新聞社の方が書いた本だったのですが、例えば原子力学会員 500 名と書いてありますが、学会の中でも、放射線の面でそれほど実績がない方が、大きな声を上げて発言されていたりするわけです。ランダムに選ぶといっても、どのように選出されるのかは、すごく気になります。

やはり市民は、特に私なんかは本当に、事故後いろいろな講演も伺いましたけれども、聞けば聞くほど、もっと聞かないと分からなくなるというか、聞けば聞くほど自分の立ち位置がどちらにいけばいいのか分からなくなったりしました。そうすると、声の大きい人がいれば、そっちに引きずられたりしますよね。まあ、それも含めてなのかもしれませんけど。

(木村) 学会員もどう選ぶかということですね。

—— そうですね。その先生がどういう方で、どんな実績をもっている方か、一般市民はまず知らないですよ。実際にはそんなに大した論文を書いているわけではないとか、そういうことは分からないではないですか。

(木村) どきっとする話ですね。

—— ご指摘のこと、非常によく分かるのですね。すぐに固有名詞が浮かんできましたけれども (笑)。テレビにもよく出ておられる某先生は、ずいぶん立派な肩書きをお持ちですが、ところが今ご指摘の通り、放射線の危険性については 100 倍も間違えて、講演会でお話になっているし、ホームページにも 100 倍間違えた数字をお書きになっている。

私は、それが 100 倍間違えているということをインターネットに書きました。はじめは固有名詞で書きたかったのだけど、それは控えたほうがいいというので、固有名詞は避けましたけれども。だけど、そういう意味で、良識ある専門家は、そういう人がいることに対して憤っているのです。ですから、そういう人はメンバー選択から当然外れると思いますけれども。まあ、ほとんどいませんよ。

本当に困りますね。まったく分かっていない。放射線の専門家でもないのに、そういう間違えた放射線の説明をしています。今、専門家が皆口を噤んでしまったから、本屋さんに出回っている放射線の本の 7、8 割は素人が書いています。その素人が書いている本は、押しなべて 100 倍間違えています。ですから、この 4 月から基準が 500 ベクレルから 100 ベクレルに、5 分の 1 に下がりましたがけれども、下がった理由はそれですよ。100 倍間違えた情報が世の中に出回っていますから、小宮山大臣がヒヤリングした中にも間違えている人たちが大勢いましたから、それに引きずられてしまった。そういう人たちは、おっしゃる通り、声が大きいいし、あちこちでそう言いまわっていますし。

ですから、正しいことを言っている人たちは、本当のことを言っているのに、原子力擁護派で嘘を言っているって、つるし上げで炎上していますよね。長崎大学の山下先生なんて、本当にお気の毒で。

私が、100 倍間違えているということ、東大の中の、全学に流れるメーリングで書こうとしたら、編集長が逡巡しまして。結局、文科省にかけあって、載せてもらいました。

1 通も反論のメール来ませんでしたね。誰も反論できない。私はちゃんと技術的に、誰が見ても分かるように 100 倍間違えているということを指摘しましたがけれども、炎上も何もない。私は、最初の原稿には、間違えている本の名前も、ページも全部書きました。ただ、それはあまりにもどぎつすぎるといって、最終的にはそれを削って、世の中にそういう本が多い、という書き方に改めましたが。

まあ、選定のときには、選定する側にそういうことを分かっている人が多いですから、そういうおかしな人が入ることは、まずないですよ。

(木村) 公正性も見ていきますけれども、ある意味では、専門家側はかなり気をつけて選定しないと危ないという問題も同時に出ていまして、そこは少し、いろいろディスカッションしていこうかなと思います。

そろそろ終了の時間になってきましたので、最後に今日のまとめをしたいと思います。

竹中君の資料のスライド 8 に、「設計段階」がまとめてあります。これが、若松先生から出てきた、フィールドを設計する順番になっています。

これを見ていくと、「観察者の目的設定」は、先ほど竹中君も分析してくれましたけれども、ある程度できていると。

「フォーラムの目的設定」はできていない。これは早急にやる必要がある。

「テーマ研究、専門家ネットワーク」は、むしろ内容に関わるところに近いのかな。これはそういうことですよ。

(竹中) これは正直、大丈夫かなと勝手に思っているのですが。

(木村) ということです。

そして、議論になっていた「市民パネルの募集、決定」が次の段階ですが、ここについての議論も残っています。

これらが決まった後に、「ワークショップの内容」、どういう話題をやるかということと、「段取り」を決定して、今年度中にはマニュアルも作っていく。

こういうことを、今後決めていきたいと思います。

これから議論しなければいけないところは、「フォーラムの目的設定」、「参加者の決定」です。その上で、「ワークショップの内容、段取りの決定」。大きくはこの3つかなと思います。ということ、今日は最後にまとめとして皆さんに認識していただいて、終わりにしたいと思いますが、いかがでしょうか。

—— 参加者というのは、市民と専門家の両方に対して議論する必要がありますね。

(木村) そういうことです。参加者両者に対して、お互いにモチベーションがあるようにしないとダメですね。

—— そして、今のことを3月いっぱい決めれば良いということですね。

(木村) スケジュールから考えると、社会調査の内容を12月末に決定して、1月に調査をします。なので、実は12月中旬までには、参加者を選ぶ基準を決めて、こういうことで募集してくださいと、お願いをしなければなりません。

その上で、細かい段取りやマニュアル作りは、来年の2月までにやるということになります。

4. その他

—— スケジュールに関連して、このフォーラム検討会議の残り7回の日程を決めたいので、あとでメールで日程調整のお伺いをさせていただきます。

(木村) 2週間に1回くらいの頻度になるのでしょうか。

—— そうですね。それくらいでないと間に合わないですね。

(木村) 次回については、今決めてしまいましょうか。

(日程調整のため、略)

(木村) それでは、次回は 11 月 27 日の 15 時から 17 時ということで、よろしくお願いいたします。

—— 先生、最後に 1 つ伺っていいですか。

フォーラムの参加者の選定の話伺っていて思ったのですが、「ゲーム作り」みたいに、1 人 1 人に役割を与えて、例えば「武器を与える」と言うと変ですが、専門家には武器を持ってもらって、そういう感じで進めるということですか。そうではないのですか。

(木村) 違います。そもそも、皆武器がないよね、という状態から始める、と思っています。それはでも、中身の議論なので、また後ほど議論しましょう。

—— 略称の提案ですが、「越えるため」の K、「コミュニケーション」の C、「フィールド」の F で、「KCF」はいかがでしょう。

—— ケンタッキーフライドチキンみたいですね (笑)。

(木村) でも、私たちが考えていたものよりはいいですね。

—— 何を考えていたのですか。

(木村) あえて、「カムラプロジェクト」(笑)。

では、略称は宿題ということで、皆さん考えてきていただければと思います。

では、今日は長い間どうもありがとうございました。これで終了させていただきます。

以上